

人文学と批評の使命

——佐藤泰正著『文学の力とは何か』をめぐって——

浅野洋

右のタイトルは、E. W. サイドの生前最後の著書名を流用したものだ。『オリエンタリズム』によって早くその名を知られたサイドは、従来の〈オリエント〉が西洋の価値観による一方的なまなざしの枠組みに抑圧された概念であることを別括し、その名をあげたが、同時にパレスチナの自由を大義とする発言によってもその存在を知られた人物である。いわば文学批評よりも政治的批評や実践をもつて耳目を集めてきたサイドが、癌の発症と戦いながら最後にまとめた著書が『デモクラシーのために 人文学と批評の使命』（二〇〇六・八、岩波書店）と題する一冊であった。〈サイドと佐藤泰正〉、この一見いかにも異質な二人の

ものがないと思われた。たとえばサイドの著書に対するアキール・ピルグラミの行き届いた「序文」を一読すると、無縁に見える二人の著書がはるかに交響し合っているかのよう感じられる。試しに「序文」の一節を、サイドに代えて佐藤氏の名を冠し、一部を改訂して引用してみる。

著書を並べるといふ突飛な着想に果たしてどれほどの意味があるのか、我ながらはなはだ心もとない。しかし、佐藤氏の大冊の著『文学の力とは何か 漱石・透谷・賢治ほかにふれつつ』（二〇一五・六、翰林書房）やその長い足跡をひとくちにまとめるとしたら「人文学と批評の使命」というタイトルほど正鵠を射た

この「文学の力とは何か」（原文はサイドの著書）を見ると、その足跡を、人文主義というもつと大きな哲学的背景に位置づけることができる。人文主義は、この二、三十年の文学理論の前衛的發展によって、あまりに感傷的で敬虔なものに見えるようになってしまっているが、佐藤氏（サイド）にとつては、頑固な理想を掲げて肯定し続けた唯一の「主義」なのである。

著『文学の力とは何か 漱石・透谷・賢治ほかにふれつつ』（二〇一五・六、翰林書房）やその長い足跡をひとくちにまとめるとしたら「人文学と批評の使命」というタイトルほど正鵠を射た

この一節を、たとえば『文学の力とは何か』冒頭の一文「漱石における〈文学の力〉とは何か」（一）の末尾部分に対応させてみよう。佐藤氏の文学に取り組む一貫した姿勢、すなわちその「唯

一の『主義』』は、以下のような文言に典型的に表れている。

言葉にこもる、作家内面の核心とも言うべきものの何たるかを問いつめる所にこそ、作家の遺した〈文学の力〉そのものを受けとめる、我々自身の力もまた生まれて来るのではあるまいか。（作家）の原文は「漱石」

作家の遺した〈文学の力〉を受けとめ、そればかりか「我々（人間）自身の力もまた生まれて来る」という佐藤氏の姿勢を、大きな「哲学的」立場に還元するならば、それはサイドに見られる「哲学的背景」としての「人文主義」に通じるのではあるまいか。むしろ、佐藤氏の「人文学」を、近年の「文学理論の前衛的発展」とは無縁の「感傷的で敬虔な」仕事と見るのも大きな間違いだ。氏は、近年の理論的發展を十分に承知しながら、それに抗して「頑固な理想」を掲げ、あえて右のような「人文主義」を「唯一の『主義』」として肯定し続けてきたのだ。そのことは「批評」の復権、〈文学〉の復権（Ⅳ）の一章を見れば明白だ。そこで氏は、柄谷行人の近著『近代文学の終り』を批判しながら「〈文学〉における真の〈批評〉の覚醒」を促し、「テキスト論やカルチュラルスタディーズなどの流行以来」「表現主体にかかわる〈探究〉」が没却されているが「ここにこそ〈批評〉の復権〈文学〉の復権の拠点がある」と述べる。氏の同時代へのまなざしは、「漱石を読む」とは（Ⅱ）においても、ロラン・バルトの『零度のエクリチュール』を援用し、かつて「作者の死」を宣

した同じバルトが後年の『テキストの快楽』では「テキストの内面に、何らかの形で、作者を私は欲する。私は彼の形象（彼の表象でも、投影でもない）を必要とするのだ」といった言及を引用していることでも明らかだろう。こうした目配りをした上でなお、氏は次のように強調する。

テキストは読者に対して開かれると同時に、作者に対しても徹底して開かれるべきではないのか。（中略）作品と作家を串刺しにして読む、その批評行為の、あるいは解説行為のダイナミズムこそが、いま改めて問われねばなるまい。

佐藤氏の言う「作品と作家を串刺しにして読む」「批評行為」「解説行為のダイナミズム」とは、言うなれば以下のような「文献学」に相当するといつてよい。再びサイドに寄り添うアキールの「序文」を見てみよう。

批評は文献学であり、ことばの「歴史」であり、伝統の「受容」であり、かつそれと同時に、その伝統とことばが積み重ねてきた慣習の山に対する「抵抗」なのだ。

サイド自身もまた「文献学」について、次のように語っている。

第三章では、文献学の役割の肝要さを論じている。注意深く、想像力を働かせた精読について解説したのは、テキストが言っていることに心を聞く（そして開いた結果、かなりの強さの抵抗にも出会う）訓練こそ、この語の最良かつもっと

も広い意味において、人文学的理解への王道だと期待しているからだ。(まえがき)

漱石を論じる佐藤氏は、しばしば作家以前の一文「人生」(明二十九・九)を引き、漱石の心中深くに横たわる「二辺の対立する矛盾」に注目する。そして、この「矛盾」を「手放さずに生き抜くことこそが、この矛盾に満ちた人生を生き抜く力」だとして漱石作品解説の核心へと繋げてゆく。こうした氏の「解読行為のダイナミズム」は、サイドの述べる「注意深く、想像力を働かせた精読」すなわち「テクスト」に「心を開く」「文献学」そのものであり、それこそが「人文学的理解への王道」だという「期待」を、佐藤氏もまた固く信じているからにはほかならない。一方、今日の欧米中心の支配構造からすればマイノリティのパレスチナ人であって、世界を席卷するグローバルイズムの虚妄性を暴こうとしつつ、しかもグローバルイズムの中心軸に位置するアメリカ国内で生活し批評活動を続ける——そうしたサイドの心底にも「二辺の対立する矛盾」はきつと深く刻まれていただろう。その戦闘的批評家のサイドの胸底深くに抱かれていた「人文学」と佐藤泰正のそれとは、見かけほど遠くないのではあるまいか。このように見てくると、本書『文学の力とは何か』の核心は、早口にいえば、あるべき「批評」もしくは「人文学(ヒューマニズム)」に深く測鉛を下ろす「文献学」の真摯な実践であると要約できよう。

人文学と批評の使命——佐藤泰正著『文学の力とは何か』をめぐるて

* * *

佐藤氏の新著『文学の力とは何か』は、書き下ろしの巻頭文を始めとする長短六十八編(「あとがきに代えて」を加えれば六十九編)の文章を収める。それらが七(VII)部構成の章立てに編集され、実に約八七〇頁の大著となつている。巻頭の「漱石における「文学の力」とは何か」(一)は、佐藤氏の「文学」に対する本領を最も端的に物語る漱石文学の核心を述べたもので、それは同時に、本書の根底を深く太く貫いている鉱脈の「露頭」であり、大著の海原に漕ぎ出すための羅針盤ともいえよう。対して、巻末の「作家・作品の急所をどう読むか」は、本書を構成する各章のエッセンスを包括する概説となっており、本書全体を見渡すガイド機能をも担っている。それゆえ、場合によっては、巻末のこの一文をまず繙き、これを手掛かりとして各章の内実に分け入ってゆくことも可能だろう。

本書の中軸が、その分量や熱量からして、多彩な漱石論にあることは明白だ。続いて言及されることが多いのは、宮澤賢治と遠藤周作を軸とするキリスト教文学、さらには補助線としてのドストエフスキー文学といつてよい。しかし、漱石に関しては前著『これが漱石だ』(櫻の森通信社、二〇一〇・一)で胸のすくような見解が縦横に語り尽くされ、それ以前の多くの漱石論もすでに定評がある。また、賢治文学やキリスト教文学についても、氏の成果が既に高い評価を得ているのは周知のことだ。それゆえ今

回の新著の中では比較的論じられることの少ない対象を取り上げた論を主に言及してみたい。

まずは「一葉をどう読むか——『にぎりえ』を軸として」(一)と題する論述だが、一葉論に言及する前にサイドの言に耳を傾けておこう。「文献学への回帰」と題する第三章は次のように書き起こされる。

文献学は、人文学と関連した学問分野のなかでも、もつともノリが悪く、セクシーさに乏しく、古臭い分野で、二十世紀初めにおける人文学と生の関連を論ずるにあたって、一番浮上してきそうにないものだ。しかし(中略)、過去百五十年間の西欧のすべての思想家のなかで、おそらくもつともラディカルで、知的に大胆不敵な思想家であるニーチェが、自分になにをにおいても文献学者であるところになみなし、実際にもそうであったと指摘するところから始めよう。(中略)

ヨーロッパではジャンバッティスタ・ヴィーコの『新しい学』が、一種の文献学的ヒロイズムにもとづいて解釈学の革命を起こし、その結果ニーチェが一世紀半後に述べるように、人間の歴史に関する真実は「隠喩と換喩の移動部隊」であることがはつきりしたのであった。歴史の真の意味は、読みと解釈の行為によつてたえず読み解かれるのであり、こうした行為は、現実、つまり隠され、誤解され、抵抗する、困難な現実を伝える言葉という形態に基礎をおいている。言いか

えれば、読みの科学は、人文科学にとつて至高のものなのだ。

このサイドの発言をごく簡単に要約すれば、「人文学」関連の「学問分野」で最も「古臭い」と見なされがちな「文献学」——その「読みと解釈の行為」——こそ「人文学」の揺るぎない「基盤」であり「枢軸」にほかならない、と。

佐藤氏の「にぎりえ」論は、その「読みと解釈の行為」すなわち「文献学」のきわめて誠実な実践といつてよい。「なかなか厄介な作品」である「にぎりえ」を前に、氏はテキスト本文に見える「難所」を一つ一つ丁寧に読み解いてゆく。たとえば、作品冒頭のお力と手紙をめぐる場面の「巻紙」二尋も書いて二枚切手の大封じ」について、出原隆俊・戸松泉・高田知波・山本洋ら諸氏の先行文献を逐一検討しながら、それが「赤坂以来の馴染」客からの手紙であり、その前にお高がお力に語りかける「先刻の手紙」がその返事であることを論証する。また、結城朝之助とお力の会話に見える「出世」の一語をめぐって、前出の戸松氏・山本氏らの論がテキスト自体からやや離れた立論にすぎないと指摘し、「作者は外に在るのではない。作者はただ作中に生きる。作中人物とともにある」とし、「作中の〈声〉」に一葉その人の肉声を読み取る。さらに「私も丸木橋をば渡らずはなるまい」としてお力が町中へ飛び出し、異常な感覚に包まれる問題の場面から結城への「告白」に至る経緯ついて、前田愛・愛知峰子・岩見照代・戸

松氏・田中優子・出原氏ら諸氏の先行文献を参照しつつ、お力の〈もの思ひ〉と重なる一葉の「考へ」や問いかけが「抑圧をしいられた当代の女性の苦悩に対する熱い共感へと傾いてゆく」さまを論じる。

ところで、上記の文脈で先行研究者の名前をうるさくあげたのにはわけがある。学問に年齢は関係ないと叱られそうだが、本論の初出は二〇〇七年一月（梅光学院大学『日本文学研究』四二）で、氏がこの一葉論を書いたのは御年九十歳前後、それでもなお、はるか年少の研究者の仕事に対して敬意と目配りと厳しい取捨を怠らない―その事実が驚嘆せざるを得ないからだ。先学への謙虚な姿勢と粘り強い「読みと解釈の行為」に支えられた「文献学」こそ「人文学的理解への王道」といえよう。ちなみに、論の末尾でこの「小論」が「テクスト論以来、ともすれば疎外されて来たかみえる〈作者〉の問題、さらには〈作家〉の問題に対して」の「反論」だと明言する凛とした後記にもなお驚かされる。最後に一言すれば、小説終幕の「源七、お力の心中も合意のそれか、無理心中かの詮索など何事でもあるまい」とし、前田氏もその詮索に否定的だが、果たしてそうか。私見ではその〈行間〉をさらに読み込む余地があると考えている。

*

*

著者の本意は別として、筆者個人の関心でいえば「松本清張一面―初期作品を軸として」も興味深い論考であった。その興味の

度合いは、清張関連の情報に疎い筆者の無知に由来するのかもしれないが、教えられ、感じるところが多かった。

この清張論は、意外な切り口に始まる。田辺聖子の伝記小説『花衣ぬぐやまつわる わが愛の杉田久女』において、同じ久女をモデルとする清張の初期短編『菊枕―ぬい女略歴―』に対する批判への疑義がそれだ。久女の「怨念と背信、相剋と嫌厭の苦しい味」を俳句の「短さゆえに骨身を削る、苛烈な修行が人の心を萎縮歪曲させる」とする田辺氏の見立てに対し、氏は「俳句自体ならぬ、俳壇、結社がおのずからに孕む一種の権威的、権力的構造」、その象徴的存在である高浜虚子からの圧力が「見落とされている」と述べる。制度や組織の桎梏が一個の人間性を冷酷に撓めてしまう哀しみにまで届いていないことへの不満である。続いて、田辺氏が「初期の傑作群」としてあげた「断碑」「ある『小倉日記』伝」「初期の傑作群」としてあげた『小倉日記』「伝」一篇こそが傑作の名に価する」とし、この三編に数編を加えた平野謙のやや肌理の粗い評価にも釘を刺す。人間性を撓める〈外部〉の理不尽さを見逃さぬ氏の眼は「宿命」が「単にその人間の性格やふるまいからのみ生まれる」ものでなく、「懸命の行為の果てにすべて消え去るといふ、予期せぬ運命の悲劇」すなわち「人間という、有限的存在の受けるべき最終の〈宿命〉」に注目する。その具体例として「ある『小倉日記』伝」の主人公田上耕作の生涯を〈徒勞の美〉だとし、作品末尾で、耕作の死の翌

年に鷗外の「小倉日記」が発見された「事実を（耕作が）知らず

に死んだのは、不幸か幸福かわからない」とある末尾に「作中の底にひそむ作家心情の深さ」を見、本作が「初期作品中、格別のもの」だと評価する。氏の洞察は、耕作の生年と清張のそれ、耕作の没年と清張の作家デヴューの年、その合致に清張自身と耕作との深い重なりがあることも見逃さない。余談だが、題名直後にエピグラフのように引用された鷗外日記の一節（明治三十三年一月二十六日付）、その静謐で変哲のない記事に「この作品一篇を流れる情調」と「失意の状態にあつた鷗外の心情」との「微妙」な「呼応」を見いだす氏の〈感性〉には紙背に徹する眼光を思わせるられた。

ところで、この清張論の本当の眼目は、むしろ初期作品の終末を飾る中篇小説『黒地の絵』への論究にあるのではなからうか。この作品が「題材それ自体の衝撃的な重さを、まだ十全に処理されていない憾みがある」とした平野謙の批判に「何処を見て言っているであろう」と鋭く反発し、作中の乾いた死体描写に見られる「逆説的表現」の構造を懇切に解きほぐしながら作者の着眼点を同定してゆく。その結果、本作の「底にひそむ作者の痛切な反戦の意識と黒人差別への痛烈な批判」を析出し、それが後に展開される清張文学の壮大なスケールの原点であることを指摘する。ここに氏の直接的な〈私のことば〉はないけれど、清張の社会に対する怒りはまた氏自身の声無き〈怒り〉であることが十分に窺える。

に窺える。

サイドは言う。

わたしの関心は、実際に使える人文学、自分がなにをやつていて、学者としてなにに義務を負っているかを知りたいと願ひ、その原理を自分が市民として生きている世界につなげたことも思っている知識人や研究者にとつての人文学にある。

（第一章 人文学の圏域）

『黒地の絵』をめぐる佐藤氏の論述は「自分が市民として生きている世界につなげたい」という「人文学者」の「思」いがひときわ色濃いつキリストなのではあるまいか。

*

*

紙数もだいぶ費やしたが、もう一編〈語り〉の転位——水上勉と芥川龍之介〉の前半部について簡略に触れておきたい。水上の短編「寺泊」や「壺阪幻想」を論じた中上健次（原文参照）は、特に前者について「語りだけが、沈黙の、つまり、性と生と聖死と死穢と賤の混合したところを、主人公の〈ぼく〉を離れて、一人歩きしている」と述べ、さらに「短篇小説は、謳うこと、語ることよりも、むしろ黙る事なのである。だが語りは黙らない」と続ける。中上の言及について佐藤氏は「水上文学の根底に深い〈語り〉の構造を見ている」と一定の評価を与えつつも、〈語り〉の構造と言っただけではすまぬ、ある微妙な転位がみられる」とし、そこに「語り」の往相から還相への過程」があり、「その微

妙な転機」を評伝『一休』のうちに見る。中上の述べる短編小説の要諦、「むしろ黙る事」「だが語りは黙らない」は、ラカンのテーゼ「沈黙は言語のように構造化されている」を想起させる。佐藤氏によれば「〈語り〉の往相から還相へ」の「転位」とは、ひとまず「抒情の往相」が「自然」凝視の還相」に向かう「還路」をさす。氏によれば、水上文学の「幻想」とは「現実そのものの示す仮現の相貌」であつて、それを剥ぎ取つて『根雪』のごとき貧苦の刻印」を「発掘」し、「そこに宿業ともいうべき人間の出自と風土にからむ生の実相を彫り込まんとする」ところが「自然」凝視の還相」であり、『一休』では一休の臨終に待する旨目の「森女の闇世界」から「捉え返される」世界がそれである。と。〈往相と還相〉は氏に親しいキイワードで、ここでは十分に説得的であるが、その熱のこもつた読みが時に読者を置き去りにする場合がないでもない。しかし、この熱が「信」に基づく全身全霊を賭したテキストへの参入であることを思えば、むしろ問われるのは、ともするとその熱を忘れがちな我々自身の方だろう。

サイドは言う。

真に文献学的な読みとは能動的なものだ。そこにあるのは、言葉のなかですでに進行している言語の運動に入りこんでいくこと、目の前にあるいかなるテキストであれ、そこに隠された、不完全で、覆われ、歪められているものを暴くことだ。(第三章 文献学への回帰)

佐藤氏はその「熱」を帯びた「使命」感をもつてテキストの内奥を「暴くこと」に全力を注ぎ続けている。他方、近年の、とりわけ学会という制度の枠内で「学者」を標榜する人々に「能動的な」読みや「言語の運動に入りこんでいく」熱は欠落しがちである。サイドは、マサオ・ミヨシのエッセイを引きつつ、次のように述べる。

ミヨシはさらに、人文学は(中略)皮肉なことにポストコロニアリズム、エスニック・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズといった新しい隣接分野の流行のために、現代との接点を失い、なかば中世風に重箱の隅をつつくばかりになつていると言う。こうして人文学は事実上、価値観、歴史、自由などの批判的探求という本来の関心から逸れて、多くの場合アイデンティティに乗つかかつた自墮落な専門性ことば紡ぎの工場と化しており、内輪ことばと専門的な弁論は、仲間内とその弟子たち、他の学者にしか向けられていないように見える。(第一章 人文学の圏域)

「失」われたのは、「現代との接点」ばかりではない。文学作品そのものに肉薄する「能動」性と「注意深く、想像力を働かせた精読」すわち「解読行為のダイナミズム」や、「自分が市民として生きている世界に近づきたい」との「思」いもまた「失」われつつあるのではないか。そして、自戒をこめていえば、何よりも「失」われたのは、周囲に媚びることも右顧左眄することもな

い胆力と、己の信じる道をただ「一筋に」歩み続ける持続力である。巻末の「あとがきに代えて」で佐藤氏は語る。

十六歳のドストエフスキイとの出会いから言えば八十二年、漱石との出会いから数えてもほぼ八十年近い人生を只一筋に文学探求に打ち込んで来た（以下略）

重要なのは、「只一筋に」に歩んで来た「八十年」余りという時間の、単なる長さではない。それが人間にとって真に大切なことを常に問い返し、自身の内なる矛盾との妥協なき戦いを続けながら歩む「一筋」であり「八十年」余りなのだ。

本書が「八十年」余りの「歩みの一端」であり、諸方面での講演記録や発表原稿の集成である以上、繰り返し部分が無数に接してきただけではない。現に、著者の赫々たる業績に今まで多少は接してきた筆者にとつてもなじみの言説がないでもない。しかし、一見同じ繰り返しに見えても、「語り直す」ごとにわずかに加わる新しい発見や深まりがある。その微差の意味を考えることこそ重要なのだ。そもそも人間にとつて真に大切な問題が幾つもあるわけではない。次から次へと更新される主題など、かえって怪しいというものだ。いや、人がその一生をかけて真剣に考え抜くことのできる主題はただ一つだと言つてよい。佐藤氏の「一筋」もその「ただ一つ」を指す道だったに違いない。

「書評」にも「紹介」にもならぬ奇怪な一文で紙数を濫費した非礼を詫びたい。ただ、この一文が希有な「人文学者」佐藤泰正

と同じ空気を吸う僥倖を得られた喜びに発していることだけは確かだ。

最後に、再びサイドの著書から幾つかの文言を引用してみよう。

「人がほんとうに知ることができるのは人が作ったものだけである。言い方を変えると、何かを知るとは、それが作られた際のありかたを通じて知ることである。」（第一章）／「人文学者にとって、読む行為は自身を作者の立場に置く行為であり、作者にとつて書くこととは言葉で表現された一連の決定と選択なのだ」（第三章）／「歴史を解釈し理解することが可能なのは、（中略）『人間が歴史を作った』からで、われわれが知ることができるのは自分が作ったものだけである。」（第四章）／「人文学のテクストを理解するためには、自分がそのテクストの作者であるかのように作者の現実を生きて、作者の生に内在する生きた経験を感じるように博識と共感を結合させなければいけないし、この結合こそが文献学的解釈学のいちばんの特質となるのである。」（第四章）。

これらの文言が、サイドならぬ佐藤泰正氏のことではあったとしても何ら違和感を感じない。これこそ『文学の力とは何か』の哲学的背景であり、その姿勢であり、使命であり、方法でもあり、と筆者には思えるのだが……。

(注) サイドは「人文学」の概念を論じる「作業仮説」として次のように述べる。

人文学は世俗の歴史、人間の労働の産物、表現を作り上げる人間の能力にかかわる。R. S. クレインのことばを借りれば、人文学は「物理的ないしは生物学的な、一般的自然法則による説明や、社会状況や集合的諸力による説明には、うまく適さないものすべてからなりたっている。……要するに、ふだん人間の業績といわれるものである」。人文学は、人間の意志と営為によって達成されるものである。市場や無意識の働きをどれほど信じようと、人文学はそうしたシステム、非個人的な力とは別物である。(第一章 人文学の圏域)

(二〇一五・一一・二五)

【追記】

右の書評めいた拙文を提出した翌日(十一月二十六日)は、たまたま佐藤先生の九十八回目の誕生日であった。先生の大学院の授業前、受講する院生や二、三の職員、それに花束をもって駆けつけた樋口学長がお祝いを述べた。その場に私も居合わせた。予期せぬ祝福を先生はたいへんお喜びになった。お元氣そうで、いつもと変わらぬチョッピリ早口で、『文学の力とは何か』についての奥野政元さん(活水学院理事長・学院院长)や矢本氏(本学教員)の読後感を嬉しそうに語られた。前日に提出した拙文のことは口にしなかった。春になって活字になればいずれ読んでいただ

けるのだから、と思っていた。それからわずか四日後(十一月三十日)の今夜、先生の訃報が入るとは……。歲月人を待たずがこんな形で訪れるのかと茫然となった。残念ながら拙文は先生の眼に触れることのない空文となった。しかし、「人生を只一筋に文学探求に打ち込んで来た」先生には、ヤワな追悼文などより、こうした一文の方がかえってふさわしいのかも知れないとひとりごちた。奇をてらった書評もどきに対して「君はまだわかっちゃいないねえ」と仰言られる先生の朗らかな言葉が聞きたかった。深甚な恩顧に何一つ応えられなかったなどは言うも憚られる。ただ「文学の力とは何か」の熱い問いかけだけは肝に命じておきたい。

あるほどの菊投げ入れよ棺の中(漱石)

(二〇一五・一一・三〇)